

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號四第卷一十五第

月十年五十和昭

論叢

廣民族主義について……………文學博士 高田保馬

法幣の「法定相場」「市場相場」及「商業相場」……………十龜盛次

時論

金の將來……………經濟學博士 飯島幡司

研究

保險に於ける個人……………經濟學士 佐波宣平

國際カルテル序説……………經濟學士 田均

國際貿易の概念……………經濟學士 松井清

說苑

ハンス・フン「二十世紀の歴史的自覺」……………經濟學士 出口勇藏

社會集團に關するマイヤーの見解……………經濟學士 大橋隆憲

附錄

彙報

外國雜誌論題

社會集團に關するマイヤーの見解

大橋 隆 志

統計學史の示すところによれば、G. v. Mayr は社會統計學派の代表者、或はその一人である。彼によれば、統計學は、その独自の對象として社會集團 (soziale Masse) をもち、その独自の方法として集團觀察法 (Massenbeobachtung) をもつ。右の意味での統計學は一個獨立の科學である。而してそれは自然科學の領域にではなく、社會科學の領域に屬し、そこに於ても、特殊社會科學の領域にではなく、一般社會科學の領域に屬す、と主張されてゐる。然らば、右の如く統計學の學問的性質を支へる一方の礎石・社會集團とは如何なるものであらうか。マイヤーの見解は以下の如くであると考へる。

社會集團に關するマイヤーの見解

二

彼は科學一般につき規定を與へる。凡そ科學の目的とするところは、自然又は人間生活の、狀態と經過 (Zustände u. Vorgänge) を認識するに在る、と。概して自然に對置される對極の根本性格を何に求めるかによつて、現實世界に關する見解の性格が露出するものである。彼は自然の對極の根本性格を人間社會に求める。従つて、それを單に、人間・精神・文化・歴史に求める見解に贊同しない。その根據とする所は次の如くである。人間は、何よりも先づ大自然の一產物である。人間は自己自然と精神とに抽象され前者は自然科學の對象に、後者は精神科學の對象になる。かゝる人間は自然界に對置される性質のものでない。精神は、人間の自己自然のうちにその發展能力を秘めてゐる。だが、その發展自體を實現せしめるものは人間社會である。(註一) 精神を文化と置きかへても、實質的に意義ある變更を加へ得たものではない。歴史も自然界に對置されるものではない。自然史に對して人間社會の歴史の特殊性

- 1) 蠶川教授、統計學概論、323頁。Meitzen, Geschichte, Theorie und Technik der Statistik, (1903) 2 Aufl., S. 67. ff.
- 2) G. v. Mayr, Statistik und Gesellschaftslehre, Bd. 1. (1895) 1. Aufl., S. 22., (1914) 2. Aufl., S. 32. (以下 2 Aufl. による), Begriff und Gliederung der Staatwissenschaften, (1921) 4 Aufl., S. 204. 3) Statistik, S. 1.

が對置されうるだけである。⁷⁾ 要するに、自然とその對極の機械的切斷の試みに彼は賛同しない。彼は、兩者が相互に強く影響し合ふことを主張する。⁹⁾

以上の如く客觀世界の區別及び關係を捉へる限り、それが知識たる科學も、自然科學と社會科學とに分かれたれ、その相互關係は密接なるものとして捉へられることは必然である。例へば彼は云ふ、精密な自然研究の發達するに及んで、數・量による組織ある集團觀察に基づく、精密な社會研究が起り得たのだと。¹⁰⁾

三

彼に於て社會が自然に對置されて捉へられることは以上の如くである。更にその社會が如何なる基準によつて區分され、如何に關係付けられるかによつて、社會に關する見解の性格がより具體的に露出する。例へば彼は云ふ。國家と社會を對置する見解は誤りである。蓋し、社會とは一般的・包括的概念であり、社會關係の一切の種類を含む。國家とは強固に組織付けられた人間の社會關係の構成體の一種である。國家と社

會を對置する見解は、社會の學問 (Gesellschaftslehre) を迷路へ引き込む主要な機縁をなす見解である、と。¹¹⁾

では彼自身は社會を如何に捉へるであらうか。彼は云ふ、社會科學的研究の對象である「社會的なもの」(Gesellschaftliches) は種々あるが結局、特徴的な三種の事實系列 (drei Gruppen von Tatsachenreihen) に歸す。社會集團 (soziale Masse) (社會團 (soziale Kreise) (社會分泌物 (soziale Sekretionen) の三種と。¹²⁾

社會分泌物とは、人間社會生活の產物であり、それは觀念的なものと物的なものに分れる。觀念的分泌物は、法律・道德・宗教・言語等であり、法律學・倫理學・宗教學・言語學・美學・哲學・等、特殊社會科學の對象をなす。物的分泌物は、各種經濟財がその主要なものである。諸國民の經濟的發展が廣汎に創出した所のものである。これは、先行の經濟過程から獨立して、それ自體、集團の性質を帯びるに至つてゐるものが頗る多い。¹³⁾ これは集團たる側面に於ては統計學の對象をなすものである。^(註1)

4) G. v. Mayr, Die Gesetzmässigkeit in Gesellschaftsleben, (1877) S. 1.

5) Gesetzmässigkeit, S. 1., Begriff, S. 7. 6) Statistik, S. 2.

7) Gesetzmässigkeit, S. 3., Statistik, S. 2. 8) Gesetzmässigkeit, S. 4. ff.

9) Begriff, S. 19. 科學は元來、觀念的社會分泌物 (ideale soziale Sekretionen)

である、とマイヤーは云ふ。 10) Gesetzmässigkeit, S. 9.

社會圈とは、人間集團の編成の外化したもの (Angelegenheiten der Menschennassen) 或は又、人間の社會關係から生じた新成物 (Neubildungen) を云ふ。社會圈は社會關係の種類と度合によつて異なる。今、要素間の結合の強弱度合を基準にして、社會圈を分かつては、社會層 (soziale Schichten) 社會群 (soziale Gruppe) 社會構成體 (soziale Gebilde) となる。

社會層とは、その成員間に社會關係の同種性が事實上存在してゐるに止まり、未だ成員間に組織をもたぬ社會圈を云ふ。例へば、職業を同じくする者、職業上の地位を同じくする者、或は又、貧民層等々。

社會群とは、成員間に社會關係の同種性が事實上存在するに止まらず、その間に組織的結合の萌芽の存在する社會圈を云ふ。例へば私的組合の如きがこれである。

社會構成體とは形式的に組織付けられた社會的結合の強固な組織體を云ふ。例へば教團、地方團體、國家等々。但し、社會構成體を廣義に解し、組織をもつ社

社會集團に關するマヤヤーの見解

會圈とする場合は社構成體に社會群をも含める。¹⁴⁾

以上の如く、社會的結合の度合による社會圈の區分に對應して、科學の側に於ても、社會層を對象として社會政策學、¹⁵⁾ 廣義社會構成體を對象として狹義社會學が成立する。以上が統計學と共に一般社會科學を構成する。他方社會關係の種類を基準にし、或は個々の社會圈を對象として成立する諸科學は、社會分泌物の諸科學と共に特殊社會科學を構成する。¹⁷⁾ 右の如き社會圈と區別されて存在する所の・一般社會科學たる統計學の對象となる所の・社會集團とは如何なるものであらうか。

四

結論を先にすれば次の如くである。社會集團はマヤヤーに於ては二つの意味に用ひられてゐる。即ち、一方に於いて、社會關係又は社會圈と統一されてゐるまゝの・社會性の濃厚な・正に社會的な・現實的具體的社會集團を意味し、¹⁸⁾ 他方に於いて、社會關係又は社會圈を背後に前提し豫想してはゐるが、それはたゞ單に前

11) Statistik, S. 4. Begriff, S. 6.

12) Begriff, S. 9. ff.

13) Statistik, S. 3. u. 7.

14) Begriff, S. 8. Statistik, S. 3.

15) Begriff, S. 18. Sozialpolitik は Lehre von sozialen Schichten であり Soziallehre である。

16) a. a. O. S. 18., Statistik, S. 24. ff. 廣義社會學は綜合社會科學の意である。

提し豫想たるに止まる所の・それ自體としては社會性の全く稀薄な・僅かに前提し豫想の側から社會性を受取つてゐると云ふに過ぎぬ所の・觀念的抽象的社會集團を意味する。^(註17) 彼に於ては、社會關係は社會圈の側に殆ど吸収し盡され其處に於いて積極的な役割を果し、社會集團に於いては何等の積極的な役割を果さぬ。^(註18) 社會集團それ自體には、僅かに時・場所・事物と云ふ三つの抽象的規定が殘留せしめられるに止まる。この觀念的抽象的社會集團を現實的具體的社會集團から區別して、マイヤーはこれを第一次社會集團と名づける。統計學は、第一段としてこの第一次社會集團の悉皆觀察研究に重點を置き、第二段として觀察結果の適宜な分類により第二次社會圈認識の爲の科學的材料の獲得を期す。²⁰⁾ 以上がマイヤーの見解であると考へる。

第一次社會集團の社會性・自然性・種類につき、更に立ち入つてみれば次の如くである。

一、社會性。社會關係の特殊性^(註19)を捨象し、後に殘留した抽象的人間社會につき、尙ほ且つ社會性を云々し得

るとすれば、その社會性は、マイヤーの自問せるが如く、²¹⁾ 各種動物の類屬社會、植物の類屬群茂、更に鑛物結晶群に迄、稀薄化し得るが如くである。しかし、彼は、人類社會を歴史的發展の可能性の存在により純自然社會から質的に區別する。^(註20)

二、自然性。人類集團それ自體は自然物の集團である。従つてその自然的諸性質を統計學は取扱ふ。但しそれが社會的な問題性を持つ限りに於てである。²²⁾ 自然的諸性質は元來自然諸科學の對象である。しかし、自然的諸性質が社會的な問題性を持たぬ等と云ひ得ない。こゝに統計學は自然諸科學と密接に關係する。²³⁾ かく云ふ時、彼は特に生物學の意味での人間集團(人類集團)を眼中に置いてゐるが如くである。

三、種類。分類基準を社會關係の種類に求めない事情は、既に見た如く、Gegenschätlichen の分類の仕方²⁴⁾に歸因する。即ち、社會關係は社會圈の側に吸収し盡され、第一次社會集團それ自體には、時・場所・事物と云ふ三つの抽象的規定が殘留せしめられたに過ぎなかつ

17) Begriff, S. 18 ff. 學問分類表參照 Allg. St. Archiv. Jg. 8. 1914. Mayr, Die Statistik als Staatswissenschaft. S. 1. ff.
 18) Statistik, S. 3. 例へば mannigfach sozialisierten Menschenmasse の如し。
 19) Statistik, S. 4. ff. 20) Statistik, S. 2 u. 4. 21) Gesetzmässigkeit, S. 2. ff.
 22) Begriff, S. 7. 更につけ加へれば、社會的な性質が必ず社會的な問題性を持つ

た。この第一次社會集團中、最も重きをなすものは人間集團である。^(註23)この人間集團に出發し、彼は社會集團の主要種類を、人間集團(Menschennassen)人間事象の集團(Massenscheinungen von menschlichen Handlungen und Ereignissen)事象結果の集團(Masseneffekte solcher Handlungen und Ereignisse)の三種に分つ。^(註24)更に時との關係に於て靜大量(Bestandsmassen)動大量(Bewegungsmassen)の二種に分つ。右が第一次社會集團の主要種類である。

彼に於て第一次社會集團の形式的な規定を求めれば次の如くである。社會集團とは、所與の時と場所に於ける社會的要素の事實上の聚落狀態(zeitlicher Aggregatzustand)を云ふ^(註25)。マイヤーに於ける第一次社會集團の特色は、その背後に社會圈が前提し豫想されてゐることであつて、或時は社會圈が遙か後方に退き、人間集團は單なる生物集團であるかの如き様相を呈し、或時は又、社會圈が前面に歩み出て人間集團の社會性が強く出現する。この場合は現實的具體的社會集團の様相を呈する譯である。

社會集團に關するマイヤーの見解

五

以上で社會集團に關するマイヤーの見解を一應紹介し得たと考へる。殘された問題は次の如くである。

(一)統計學が社會集團を問題とせざるを得ぬ根據、
(二)社會集團の種類の詳細、(三)社會集團に對する統計學としての諸規定、以上三つについてのマイヤーの見解、(四)社會集團が彼の統計學に於て現に果してゐる役割、以上の四つの問題。

社會集團は、統計學に於てのみならず社會學^(註25)に於ても問題とされてゐる。しかしそれは社會統計學派の統計學^(註26)に於て特に重要な地位と意義とをもつものの如くである。にもかゝらず自分にとつてはその諸性質を從つて又その諸規定を、充分明確に理解し得ない。マイヤーの見解についても或は曲解してゐるのではないかとの危惧をもつてゐる。かゝる事情の下に自分の理解した概略をのべて御教示を仰ぎたいと思ふ次第である。

22) Statistik, S. 26. ff., Gesetzmäßigkeit, S. 2. ff.

23) Statistik, S. 5. ff. 24) Statistik, S. 5. ff.

25) H. Bratz, Zum Begriff der Masse in der neueren Soziologie, (1936). 松本潤一郎、集團社會學原理。圓谷弘、集團社會學原理。清水總太郎、社會學關係の諸著。

(註一) Gezelmasigkeit, S. 2 n. 5, Statistik, S. 2. 彼は精神科學に必ずしも反對する譯ではない。しかし精神科學の場合には主として個人の精神に關する。人間の集團を研究する統計學にとつてはその學の性質上、社會が、從つて社會科學が意義を有する、と彼は云ふ。

(註二) Massen-Zustände u. Erscheinungen を簡單に集團として置く(以下同じ)。社會關係の側面からすれば、その社會關係を對象とする社會科學の對象をなす。(Begriff, S. 19. 參照)

(註三) この場合に於いて、前提Ⅱ豫想から社會集團を切斷してふならば、社會性は全然失はれて、單なる集團に轉化する。かゝる單なる集團を問題とするならば、それは自然科學たる社會科學たる、又はその他の形式科學たるに問ふ所ではない。

(註四) Begriff, S. 7. ff., Statistik, S. 207 ff. 實用統計學の、特に社會統計學の編別に當りては、前提の社會性が強く前面に浮び出て來る。

(註五) 凡ての歴史時代に共通する社會關係ではなく、特定の歴史時代に特殊な社會關係の捨象を意味するが如く解しうるが、彼に於ては必ずしも明確ではないが如くである。

(註六) Gesetzmäßigkeit, S. 3. ff. (註三參照) マイヤーは云ふ、純自然社會に歴史的發展の根柢ありとすれば、例へば有用植物の群、家畜の群居生活の如く、それは人類發展の對象化であつて動植物それ自身の發展史ではない。動植物それ自體の歴史は、ダーウンの意味の有機體發展史のそれであつて、純自然過程に他ならぬものである。

(註七) Statistik, S. 26 n. 49. 勿論こゝで云つて人間は生物學的意味での人間である。この人類集團それ自體が、第一次社會集團であると云つてもよいのである。(S. 40, S. 5) 尚、前提Ⅱ豫想たる社會圈を見失ふ場合は、悉皆數へ上げの範圍たる框の問題は、個別的事物の同種性の

問題と云ふ、個物それ自體の内に悉皆數へ擧げの手がかりを求めんとする所の、轉化した姿に於て現れる。(註三參照)

(註八) (Statistik, S. 50 n. 207 ff.) マイヤーは、人口統計論に於ては Bestand u. Bewegung なる語を用ひて、第一次社會集團の第一次性を表現し、社會統計論(道徳、教育、經濟、政治の部門より成る)に於ては Zustände u. Erscheinungen なる語を用ひて第二次性を表現せんとしつゝゐるが如くである。この第一次、第二次の用語については脚註 19・20 の當該個所本文參照。

(註九) Statistik, S. 53. 悉皆數へ上げの範圍たる社會圈は、個別的事物に於ては「社會的」要素と云ふ名に於いて再現してゐるのである。しかし此處に個別的存在第一主義の方向が含まれてゐることも見のがし得ぬと考へる。

(註一〇) F. Zaek, Grundriss der Statistik (1923) 2. Aufl., S. 1. ; P. Flaskaemper, Statistik Teil. I, Allgemeine Statistik (Meyers Wörterbuch (1930) S. VIII ff., Beitrag zu einer Theorie der statistischen Massen, Allg. St. Archiv, 17 Bd. 1828). 最後の論文に於ては、蜷川教授、統計學研究 I, 一五頁以下、「大體に於て」フラスケンバーの批判を中心にして參照。

社會集團の持つ地位と意義については、社會學に於ける場合と統計學に於ける場合とは異つてゐる。且つ又、同じ社會學と稱し統計學と稱するも、その學の學問的性質の實質の規定如何によつて、社會集團が各個の學說に對して持つ地位と意義とは異つて來る。このことは云ふまでもなくのことである。しかし明かなことは、少くも現代統計學、特に社會統計學派のそれにとつては、社會集團が問題である限りに於て、その數量的認識把握が問題とされてゐるのであるから、數量的な面に於て問題性を持たない社會集團は、社會學の問題たり得ても現代統計學の問題たり得ないことである。